『天狗の森のニジ』あらすじ

北の国のとある山に、天狗の森という深い森があります。その森に、こだまの妖精ニジが住んでいました。ある日のこと…ニジが隣の森のミズと仲良く遊んでいると、人間の親子がその森にやって来たのです。娘の葉子は森の美しさに喜び「ヤッホ～！」と森に挨拶するのですが、こだまが返って来ません。それもそのはず。ニジもミズも人間を見るのも「ヤッホ～！」を聞くのも初めて。こだまのたった一つの仕事を忘れてしまったのです。ところが人間の親子は、こだまが返ってこないのは人間が自然を汚したことで木魂がどこかへ行ってしまったからと、がっかりして森から去って行ってしまいました。

そこへ木魂族の長老とカシラが現れ、カシラはニジとミズを叱るのでした。
長老は子供達を責めるのは気の毒だと、山や森を忘れて都会の中で暮らしている人間達の方こそ嘆かわしいのだと、カシラを説得するのでした。するとニジとミズは、さっきの女の子が森に来る珍しい人間であることに気付いたのです。そしてニジとミズは、人間の親子が再びこの森に来る事を願い、木の上でずっと待ち続けるのです。

そんなある日のこと…南の空に大きな黒い雲がやって来たのです。季節外れの嵐です。降り注ぐ雨は、森の土を流し始めました。幸いにも嵐は去り、翌朝には、いつも通りの穏やかな森に戻ったのでした。

ニジとミズは一生懸命話し合いました。また嵐が来たら、今度こそ森が流されてしまう。南の国の嵐が北の国を襲ったのは、人間達が空気を汚くしたからだと。人間のせいで森が流されそうになったのだと。また嵐が来て、森が流されてしまったら…こだま族は滅びてしまう。ニジは人間と話をして、この事を伝えようとミズに持ちかけます。ミズはそんなことしたら、木魂族の掟で石になってしまうと反対します。そこに森を心配した人間の親子が現れるのでした。待ちに待った人間の女の子が、再び森にやって来たのです。ニジとミズは喜びました。今度こそこだまの仕事をしようと、女の子の『やっほ～！』をじっと待ちました。そしてとうとうこだまの仕事をしたのでした。

ニジはその時、勇気を振り絞って人間の女の子と会話をしたのです。でも石にはならなかったのです。石にならなかったニジを見て、ミズは大喜び。そしてニジとミズは、これ以上空気を汚さないでと…その事を人間達に伝えて欲しいと、人間の女の子と約束したのです。

その事を長老に知らせようと長老の森へ行くと、人間と会話するなど許される事ではないとカシラに叱られるのでした。しかし長老はニジ達の勇気を認めるのでした。石になることにびくびくして何もしないより、前に進む勇気を持った事の方がすばらしいと…。そこへ人間の女の子が友達を連れてやって来たのです。それも、片手に袋を持ちゴミを拾いながら山を登って来たのです。
ニジとミズは、本当に喜びました。森を守ってくれる人間達に会えて良かったと…。
ニジとミズは元気よく力強く『やっほ～！』と応えたのでした。